

Title	翻訳の不確定性とその帰結
Sub Title	Indeterminacy of translation and its consequences
Author	宮館, 恵(Miyadate, Satoshi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1986
Jtitle	哲學 No.82 (1986. 5) ,p.25- 46
JaLC DOI	
Abstract	Quine says that in radical translation we have two stages, one in which there is real evidence and so in which translation is determinate, and the other in which we cannot translate without depending on the analytical hypotheses and therefore in which translation is indeterminate. I argue that we can do nothing but use our linguistic habits in every stage of translation. Because we must rely on our hypotheses as to what behavior to count as the native's assent or dissent, question, and sentences, translation is in every stage indeterminate. Further because there is indeterminacy as to whether the native linguistically behaves with mind or not, translation is completely indeterminate. In consequence we find that synonymy is, without exception such as stimulus synonymy, semantic synonymy, that reference is inscrutable, that truth is indeterminate, and that belief is indeterminate.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000082-0025

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

翻訳の不確定性とその帰結

宮 館

恵*

Indeterminacy of translation and its consequences

Satoshi Miyadate

Quine says that in radical translation we have two stages, one in which there is real evidence and so in which translation is determinate, and the other in which we cannot translate without depending on the analytical hypotheses and therefore in which translation is indeterminate. I argue that we can do nothing but use our linguistic habits in every stage of translation. Because we must rely on our hypotheses as to what behavior to count as the native's assent or dissent, question, and sentences, translation is in every stage indeterminate. Further because there is indeterminacy as to whether the native linguistically behaves with mind or not, translation is completely indeterminate. In consequence we find that synonymy is, without exception such as stimulus synonymy, semantic synonymy, that reference is inscrutable, that truth is indeterminate, and that belief is indeterminate.

* 慶應義塾大学大学院文学研究科博士課程（哲学）

言うまでもなく、われわれは言葉を用いて何事かを意味し、また、他人の発する言葉を聞いて何が意味されたかを理解する。しかし、言葉が何かを意味するとはいったいどういうことであるのかは決して自明ではない。とりわけ、同一言語を話す人どうしを取り上げて、その意味理解において何が起きているのかを考えてみようとする、途方に暮れるばかりである。そこで、クワインはある言語から他の言語への翻訳の場面に注目して意味の問題を考察した。未知の言語の翻訳という作業を通じて、他人の言葉の解釈に関わるさまざまな事柄が明らかにされるというわけである。特に、翻訳に際して保存されると言われる「意味」とはいったい何であるか、そもそもそのような「意味」を措定する根拠があるか、というのが当面の問題である。

よく知られているように、クワインは Quine (1953) において、分析的-総合的の区別に反対し、一言で言えば、「意味」に対して懐疑を提出し続けて来た。彼が問題にしているのは、典型的には、文の意味すなわち命題の存否である。命題はその同一性の規準が明らかでないというのが最大の理由であるが、しかし、彼が攻撃しているのは、同義性の規準の何か特定の案に対してではなく、およそ命題を措定するという考え方そのものに対してである。この懐疑は Quine (1960) において体系的な頂点に達し、提出されたのが翻訳の不確定性テーゼであった。このテーゼはその後の哲学界に活発な論議を引き起こしたが、本稿は、そのテーゼ自体については妥当性を認め、むしろそれを徹底化してその帰結を見ようというものである。

I では、クワイン自身の叙述にそって、翻訳の不確定性のテーゼおよびそれに付随する諸概念を確認する。これをふまえて、II では、翻訳には彼の言うような二つの段階（確定的な部分とそうでない部分）はなく、むしろ翻訳はあらゆる段階で全面的に不確定であることを論ずる。さらにIIIでは、被験者がそもそも心を持って言語行動をするという点に関しても仮説

依存的な不確定性が存在し、翻訳は徹底的に不確定であることが論じられる。IVでは、その結果として同義性はすべて意味論的な同義性であること、名辞の指示対象が不確定となること、真理値が不確定となること、人の信念内容が不確定となること、などが示される。

I

クワインの翻訳の不確定性のテーゼは、次の通りである。

ある言語を別の言語に翻訳するためのマニュアルには種々の異なったものが可能であり、いずれも言語性向の全体と両立しつつ、マニュアルどうしは両立しえない、ということがありうる (p. 27)⁽¹⁾

クワイン自身の定義によると、ある人間の言語とは、その人間の言語行動への現在の諸性向の複合体であって、同一言語の話者ならばその点で必ずや互いに類似するものである (p. 27)。そこで、現在観察されるその人間の行動から、彼の現在の言語、すなわち、現在の刺激に対して言語的に反応する彼の現在の諸性向の全体、を再構成してみようという思考実験が、クワインのいう根底的翻訳 (radical translation) である。これを行なう言語学者が手にしうる客観的なデータは、被験者の感官面を刺激していることが観察されるような刺激と、その被験者の示す観察可能な言語的ならびに非言語的な行動の二つである。

このような言語学者が最初にそして最も確信を持って翻訳する被験者の発話といえは、言語学者と被験者の双方にとって明らかに目につくような現在の出来事に調子を合わせて発話される発話であろう。たとえば、一匹のうさぎが眼前をさっと走り抜けたとき被験者が 'Gavagai' と発話したら、言語学者は、試験的にそれを 'Rabbit' と翻訳するであろう (p. 29)。ここで重要なのは、'Gavagai' も 'Rabbit' も文として扱われている点である。これは語ではなく、一語文である。したがって、語 'gavagai' と語 'rabbit' との対応を主張しない限り、その翻訳は 'There is a rabbit'

であってもよい。さて、‘Gavagai’ はむしろ ‘Animal’ や ‘White’ などと翻訳されるべき文であるかもしれないから、そのいずれであるかを確認するために、言語学者は同意・不同意を表現する被験者の発話を発見しなければならない。ジェスチャーが決め手にならないことは周知の通りであり、英語の ‘Yes’ ‘No’ に全面的に対応する語を被験者の言語に期待できないことも明らかであるが（たとえば日本語の「はい」「いいえ」）、ともかくも言語学者は、何を同意・不同意の表現と扱うかについて作業仮説を立てることができるであろう。

こうして導入されるのが「刺激意味」(stimulus meaning) の概念である。これは、肯定的刺激意味と否定的刺激意味との順序対であって、ある話者にとってある文の肯定的刺激意味とは、彼の同意を促すであろうような刺激のクラスであり、否定的刺激意味とは不同意を促すであろうような刺激のクラスである。このように、刺激意味は刺激係数（刺激に認められる最大持続時間）、文、話者、時刻に相対的に決定される刺激パターン、すなわち普遍である。

‘Gavagai’ は、(同意・不同意を) 促す適切な刺激に続いて問われたときのみ同意・不同意を獲得するような文であって、場面文 (occasion sentence) と呼ばれる。たとえば、クワインによれば ‘Red’ ‘It hurts’ ‘His face is dirty’ などがそうである (p. 35)。これに対して、現在の刺激に必ずしも促されなくても同意・不同意を繰返し獲得するような文は、定常文 (standing sentence) と呼ばれる。たとえば ‘The crocuses are out’ 「クロッカスが咲いた」は毎年同意を獲得し、‘The Times has come’ 「タイムズ紙が来た」は毎日そうである (p. 36)。

さて、ある被験者にとっての場面文 ‘Gavagai’ が時刻 t において持っている肯定的刺激意味を考えてみよう。何であるかはっきりとは定めがたい動きが草むらであったとする (p. 37)。もし、その被験者が以前その場所でうさぎを見たことがあれば、彼は現在のその草むらの動きに促されて

‘Gavagai?’に同意するであろう。したがって、この刺激は彼にとっての現在の‘Gavagai’の肯定的刺激意味に属する。ところが、そのような過去の経験を持たないわが言語学者は、‘Rabbit?’には少なくとも同意はしないであろう。したがって、草むらの動きというこの刺激は、言語学者にとっての現在の‘Rabbit’の肯定的刺激意味には属さない。また被験者の友人がそばに立っており (p. 37)、被験者はその友人の観察は信頼できると思っているとしよう。すると、草むらの動きと友人の‘Gavagai’という発話もしくはうきぎの存在を告げる発話があったなら、彼は‘Gavagai?’に同意するであろう。ところが、言語学者は原地語もこの友人も知らないのだから、そのような場合でもやはり‘Rabbit?’には同意しないであろう。

このような場合には、被調査者にとっての‘Gavagai’の肯定的刺激意味と、言語学者にとっての‘Rabbit’の肯定的刺激意味とは相違することになる。我々はこれをもとに、このような刺激意味なるものはとても「意味」として容認するわけにはいかないと反論したくなる。刺激意味と「意味」とはおよそ似ても似つかぬものである。クワインも確かに、これらの例のような過去の経験、特異な付帯的情報、言語的干渉などは、被験者を替えたり時刻を変えたりしておそらく適切に除去しうるであろうと認める (p. 38)。しかし、彼は、共同体全体に共有されているような知識と「純粋な意味」とを区別するための経験的規準がない以上、「付帯的情報」と「意味」の区別は、ちょうど、「意味」だけに基づいて真であると言われる分析文と、世界についての知識に基づいて真であると言われる総合文との区別と同様、幻想であると主張する。彼によれば、付帯的情報の獲得される過程が仮にことごとく明らかにされうるとしても、話者の現在の性向はそれらと足並みをそろえて進化してきたものであるから、現在の性向の中にその区別を経験的に見出すことはできないのである。

われわれが客観的に有しているのは、自然に対する進化しつつある適

応にほかならず、それは、刺激によって文に対する同意・不同意の表明へと促されるという、進化しつつある一群の性向の中に反映されているのである (p. 39).

さて、このように刺激意味にはさまざまな変動があるにもかかわらず、適当な配慮をすることによってそれを一定にすることができる。たとえば、‘Bachelor’のように、その変動がさまざまな付帯的情報（当人に関する知識）に由来する場合、その特徴は話者によって刺激意味が異なる（共同体全体に共有されている付帯的情報の場合を除く）ことにあるから、各人における主観内の刺激意味の同一性というかたちで固定することができる (p. 42). ここで、観察文 (observation sentence) という概念が導入される。観察文とは、付帯的情報の影響を受けず、刺激意味が変動しないような場面文である (p. 42). したがって、観察文の刺激意味は、直観的な「意味」にきわめて近いものとなる。そこで、この刺激意味にのみ基づいて観察文の根底的な翻訳が期待できるわけである。各話者を通じて刺激意味が不変的である程度を観察性 (observability) と定義すると、‘Red’ のような文は観察性が高く（狭義の観察文）、‘Rabbit’ ‘The tide is out’ などはかなり高いもののそれでもいくぶん低い（広義の観察文）。‘Bachelor’ にいたっては、観察性が非常に低い、つまり、ある人物の出現に促されて ‘Bachelor’ に同意するためには、その人についてのかなり多くの情報と文どうしの結合関係とを知らなければならないのである。注意すべきであるが、この観察性という概念は、刺激意味の概念と異なり、社会的な概念である。すなわち、「各話者を通じて一定」ということで定義されているのである。（したがって、観察性の導入は、共同体全体に共有されている付帯的情報をふり落とさない。だが、クワインに言わせれば、もともとその区別には経験的な意義がない。）定常文の刺激意味も高い不変性を示すが、それは単に刺激意味に属する刺激が希薄だからである。一般に、定常文以外の文も含めて、刺激意味の希薄性は翻訳の不確定性の重要な根拠

である。こうして、観察性の高い文ほどその刺激意味が言語共同体で一定なのであるから、原地語のそのような文と英語のそのような文とを、刺激意味にのみ基づいて根底的翻訳を行なうことができる。したがって、観察文（すなわち刺激意味が社会的に一定である文）は翻訳可能である (p. 68)⁽²⁾。

さて、同義性については次のような扱いがなされる。まず、刺激同義性 (stimulus synonymy) とは、刺激意味の同一性である。刺激同義的な観察文は、以上の通り刺激意味に基づいて認定される。‘Bachelor’ のような非観察的な場面文は、各話者ごとに限定して（なぜなら、各話者はそれぞれ異なった付帯的情報を刺激意味の中に持っているから）なにか他の文と刺激同義的であると言うことができる。つまり、‘Bachelor’ は、ある話者 A にとって ‘Unmarried man’ と主観内 (intersubjective) 刺激同義的である。これを拡張して、どの話者についてもそう言えるという意味で、‘Bachelor’ と ‘Unmarried man’ は共同体全体にとって刺激同義的である、と言うことができる。このように、主観内刺激同義的な場面文には刺激意味の相違が生じないから、この主観内刺激同義性を用いると、翻訳は観察文に限定されず（二か国語話者 p. 47）、ショックでぼうっとするなどの状況や、言語的干渉の影響をうまく調節することができて好都合である。こうして、観察的ならびに非観察的な場面文、すなわちすべての場面文は翻訳可能である (p. 71 (1'))。

被験者が（係数以内の）どの刺激の後でも同意するであろうような文は、その被験者にとって刺激分析的 (stimulus-analytic) と呼ばれるから、一般名辞と単称名辞の刺激同義性の定義は、それぞれ次のようになる。

一般名辞 ‘F’ と ‘G’ は、「すべての F が G であり、かつ、すべての G が F である」が刺激分析的であるとき、そしてそのときに限り刺激同義的である。

単称名辞 ‘a’ と ‘b’ は、「 $a=b$ 」が刺激分析的であるとき、そしてそのときに限り刺激同義的である (p. 55)。

上の定義はいずれも特定の話者についてのものであるから、社会的な意味での名辞の刺激同義性が次のように定義される。

名辞が社会的に刺激同義的であるのは、それらの名辞がほとんど例外なくすべての個々の話者にとって刺激同義的であるとき、そしてそのときに限る (p. 55).

以上、名辞の同義性で注意すべきことは、これらの定義はすべて、日本語の「すべての (all)」「…である (are)」「=」の翻訳が確立されている言語にしかあてはまらない、ということである。われわれの問題の原地語の名辞について以上の定義を適用するためには、すでに分析仮説によって原地語の単語を分節化し、名辞としてわれわれの言語に対応関係を持たせていなければならないのである。この分節化こそ、不確定性の最大の原因の一つである。もともと、場面文 'Gavagai' と 'Rabbit' の刺激同義性は、名辞としての 'gavagai' と 'rabbit' との外延の同一性を保証するものではなかった。'gavagai' は、うさぎ、うさぎ諸相 (rabbit stage), うさぎ融合体 (rabbit fusion), あるいはその他何を指示するのか、その差は刺激意味には現われていないのである (p. 51-52). (これに帰因する不確定性は、同時に、指示対象の不確定性を含意する。IV を参照.)

また、たとえば 'for the sake of' (「～のために」) を他の言語に翻訳した場合、'for the sake of' を構成する4つの単語の中には、相手方の言語の単語にいちいち対応しないものが十分ありうるから、これと同様に、'Gavagai' がたとえ 'a rabbit is there' という (直観的な言い方をすれば) 意味であるとしても、'Gavagai' のどの部分も、また原地語のどの連鎖も英語の名辞 'rabbit' に対応しないことはありうるのである (p. 52). こうして、名辞の翻訳は不確定である。クワインによると、名辞も含め対象指示のための装置はわれわれの文化に独特のものであって、被調査者のそれと全く異なっているかもしれない。にもかかわらず、とクワインは続けるが、正味の効果は全く同一である。すなわち、場面文は刺激意味の点

で原地語と英語でつり合うのである。こうして、彼は場面文と刺激意味を万国共通の通貨であると言ひ、名辞と指示対象はわれわれの概念枠に特有のものであるとする (p. 53).

ここで、以上の手続きによって根底的翻訳の可能なものをまとめてみよう (p. 68).

- (1) すべての場面文は翻訳可能である。
- (2) 真理関数は翻訳可能である (IIを参照)。
- (3) 刺激分析的 (および刺激矛盾的) な文は認知可能である。

この場合、翻訳可能とは、通常の帰納の不確実性を伴いながらも、^{ユニーク}一義的に確定可能という意味である。クワインによれば、刺激に対する被調査者の観察可能な反応という経験的証拠に基づいて翻訳可能な文は、この(1)―(3)に限られる。

II

これまで見てきた通り、翻訳には刺激意味のみに基づいてできる部分 ((1)―(3)) と、分析仮説を立てなければならない部分 (名辞 etc.) があつた。そして、後者については、言語性向と完全に適合し、しかも互いに両立しえないような分析仮説体系が無数に可能である。したがって、翻訳は不確定とされたのであつた。本節では、この区別には根拠がなく、とりわけ、クワインの言うような確定的な部分がないことを論ずる。

クワインは、まず、根底的翻訳が一義的に可能なケースのあることを認めている。すなわち、(1)―(3)のケースである。話を 'Gavagai' に限ることにしよう。これは、クワインによると文である。この文の刺激意味は、英語の 'Rabbit' という文の刺激意味とほぼ同一である。したがって、原地語の文 'Gavagai' は、刺激意味の同一性を足場として英語の文 'Rabbit' へと根底的に翻訳することが可能であるとされる。では、'Gavagai' の刺激意味はどのようにして決定されるのであろうか。刺激意味の定義に

よると、刺激意味とは（話者、時刻が固定されたとして）‘Gavagai’ という疑問文への同意を促すであろうような非言語的刺激（肯定的刺激意味）と、不同意を促すであろうような非言語的刺激（否定的刺激意味）との順序対である。したがって、刺激意味を決定するには、原地語の文表現を把握し、被調査者の疑問を表わす表現を用いて問いかけ、被調査者の同意・不同意の表現を識別し、それらと因果的關係にある刺激を特定しなければならない。場面文の刺激意味は、クワインによると、名辞の刺激同義性を決定するのとは異なり、⁽³⁾ 原地語の同一性表現の理解を必要とせず、しかも原地語の名辞について立てられる分析仮説の諸体系から中立の地位にある。いったい、刺激意味の認定は、クワインの意図するような意味で言語的に中立でありうるのだろうか。

まず、原地語の「文」というまとまりを把握する点はどうだろうか。そもそも、文という概念は、その他の言語学的な概念（たとえば、主部、述部、名詞 etc.）と密接不可分な関係にある。したがって、刺激意味の概念を用いて原地語の「文」を分析するということは、すでに、原地語に名辞のあることを前提しており、よって、原地語の「文」の刺激意味は、関連する名辞の刺激意味を適切に定めないことにはそれ自身適切に決まらないことになる。クワインは、「場面文」の「文」で、「構造化されていないまとまり」を意味しようとしているが（p. 9）、それは無駄であろう。なぜなら、われわれは原地語のそのまとまりを英語の「文」という単位へと関係づけなければならない、それが原地語の当のまとまりを「文」として把握させるからである。

これと関連して、真理関数が翻訳可能であるという点についても考えてみよう。原地語のある言い回しがたとえば連言を表しているかどうかの規準は、同意・不同意を用いて次のように設定される。

連言は、ある人が構成要素のそれぞれに同意する用意があるときに限り常にその人が同意するであろうような複合文を作り出す（p. 57）。⁽⁴⁾

つまり、文 ' p ' と文 ' q ' のいずれにも同意するであろうとき、そしてそのときに限り ' $f(p, q)$ ' に同意するであろうということが確かめられれば、この f に相当する原地語の言い回しは連言の結合子を表現しているとして、たとえば英語の ' and '、日本語の「かつ」などへと翻訳されうるということである。（ただし、英語の ' and ' や日本語の「かつ」は必ずしも連言を正確に表現するわけではない。また、原地語で f に相当する表現は、文 p, q の前、間、後ろのいずれに位置するかもしれない。ひょっとすると、たとえば英語の ' $\text{both} \sim \text{and} \sim$ ' や日本語の「 \sim も \sim も」のようにそれらの組み合わせになるかもしれない。）クワインのここでのポイントは、真理関数の結合子の表現は、文 p, q の内部構造に立ち入らずに、すなわち、名辞や量化記号などの装置に依存せずに、認知し翻訳することができるということにある。

しかし、たとえば $(p \ \& \ q) \rightarrow p$ というトートロジー（この場合は常に同意を受ける複合表現）を考えてみよう。これがトートロジーであるためには、連言の左側に現われている p と条件文の後件に現われている p が同一の同意または不同意を受けなければならない。たとえばこの p が指示的要素（たとえば指示代名詞 that に相当する原地語 w ）を含む場合には、初めの p の中で使われた ' w ' と第二番目の p の中で使われた ' w ' が同一の対象を指示していなければならない。では、これはどのようにして保証されるであろうか。当然のことながら、その指示的な単称表現の第一の生起と第二の生起が同一の対象について真である、というかたちで名辞（あるいは少なくとも原地語の文の内部のなんらかの要素）に関する条件によって保証されることになる。これが満たされてはじめて、第一の p と第二の p は同一の文が二度生起したものであるとして、第一の p への同意・不同意によって、第二の p への同意・不同意も自動的に保証されることになり、通常真理関数の論理の扱いを受けることができるようになるのである。したがって、真理関数の翻訳は、文の内部構造に言及し

て述べられる一般的な条件とけっして無関係ではなく、むしろ、その充足を前提とした上ではじめて可能となるのである。

次に、被調査者の疑問表現の同定についてはどうであろうか。われわれは、言語的に中立に被調査者の疑問表現を把握できるであろうか。クワインは疑問表現を‘Gavagai?’と書き表わしているが、それが具体的にどのような行動的表現になるのかについてはふれていない。おそらく、語尾を上げるとか、物問いたげな(?)表情で‘Gavagai’を発するとかを念頭に置いているのであろう。しかし、そのような表現がたとえ英語で疑問表現だとしても、原地語でもそうである保証は全くない。また、それに反応して行なわれる同意・不同意についても同様である。首をたてに振るのが同意表現である人々は限られているし、英語の‘Yes’‘No’に全面的に対応する表現が原地語にあることも期待できない。(たとえば、すでに述べたように日本語の「はい」「いいえ」)したがって、被験者に対して質問を行ない、それに対する反応を同意・不同意として同定するためには、何を疑問表現とみなすか、何を同意・不同意の表現とみなすかについての仮説が必要である。

クワインは、同意・不同意については、その後これをはっきりと認め、この段階ですでに不確定性が侵入すると述べている。⁽⁶⁾同意・不同意さらには疑問表現の同定に関する仮説が不確定であるとする、クワインの主張する不確定性はいっそう徹底して、根拠が補強されたかに見える。だが、この段階での不確定性の侵入は彼にはむしろ奇妙であろう。なぜなら、そもそもクワインの意図した不確定性は、(通常の帰納の不確実性(p. 68)を除き)「客観的に手にしうる実在」(p. 39)であるところの刺激意味に基づいて一義的に翻訳の可能な表現と、きわめて恣意的に採用される分析仮説に拠らなくては翻訳の不可能な表現とを区別し、後者についてだけそれを負わすものであったからである。ところが、同意・不同意(そして当然「疑問」)の同定の段階ですでに不確定性が侵入するとなると、もともと確

定的なものはなにもないことになり、彼の最終的な法廷であるはずの言語性向を知る客観的な手がかりは全く得られなくなってしまうことになる。なぜなら、場面文も刺激意味も「万国共通の貨幣」(p. 53)ではなくなり、そして彼にとっては、言語性向とはなによりも文に同意・不同意を示す性向だからである。

さて、刺激意味の同定という点について考えてみよう。‘Gavagai’を‘Rabbit’へと根底的な翻訳ができるのは、被調査者にとっての‘Gavagai’の刺激意味と、言語学者（英語を母国語とする話者）にとっての‘Rabbit’の刺激意味とがほぼ同一であるとき、そしてそのときに限られていた。つまり、文の刺激同義性に基づいて翻訳可能とされている。（常に注意を払っておくべきであるが、翻訳にあたって保持されるのは刺激意味であって、言語性向ではない。言語性向を保存した翻訳は、特に異言語間ではありえない。言語性向は、自国語の文を発する性向だからである。）そこで、これら刺激同義的な文がクワインの意図するような仕方で翻訳可能であるためには、すなわち、分析仮説に頼らず、刺激意味にのみ基づいて場面文の一義的な翻訳が可能であるためには、被調査者にとっての‘Gavagai’刺激意味と、言語学者にとっての‘Rabbit’の刺激意味とがそれぞれ独立に決定されなければならない。しかし、それらの刺激意味を、英語および原地語のいずれの言語的カテゴリーからも完全に独立に、かつ、いずれかの言語（この場合は言語学者の母国語である英語）によって同定する、ということは明らかに不可能である。われわれは、多かれ少なかれ自国語の概念装置を用いないわけにはいかない。すなわち、同一性表現の把握など、分析仮説に依存してはじめて可能となっているような指示装置を用いずには、たとえ観察性の高い文についてであっても、相手方の文の刺激意味も自国語の文の刺激意味も捉えることはできないのである。

また、行動の同定を見てみよう。われわれは、被調査者が英語の概念装置（たとえばクワインによると名辞という装置は英語などの言語に特有と

される)と根底的に異なった装置を用いており、しかも、彼の言語行動が、分析者の言語に特有の装置を前提しない仕方で把握可能であるかどうかを問題にしている。それが可能であるとすれば、そのときはクワインの述べている仕方で翻訳は不確定である。だが、そのような把握の仕方は不可能である。すでに見たように、言語行動であれ非言語的行動であれ、被調査者の行動を同意・不同意の表現として解釈することは、とりもなおさず、言語学者の母国語の同意・不同意の表現をとりまく言語的ネットワークの中にそれを位置づけることである。クワインが譲歩したように、被験者の何を同意・不同意の表現とみなすかの点で、言語学者はすでに仮説に頼らなければならない。クワインの当初の意図に反し、単語や名辭を扱う場面に限らず、言語学者は被調査者の言語の分析にあたって、「すでに所有している言語的習慣」(p. 70)を常に使用せざるをえないのである。こうして、翻訳は全面的に不確定である。

III

刺激意味の同定の際、被調査者のどのような行動を同意・不同意の表現とみなすか、とりわけ、どのような発話を同意・不同意の言語的表現とみなすかは、言語学者の立てる仮説に依存するが故に「不確定」であり、そしてクワインもそれを認める。すでに論じた通り、疑問の言語的・非言語的表現の同定についても同様であろう。しかし、クワインの主張は、被調査者の同意・不同意(そしておそらくは疑問も)の言語的・非言語的表現が言語学者にとって「不確定」であるということであり、被験者の同意、不同意、疑問などの表明という言語的・非言語的行為の存在まで疑われているわけではないように思われる。⁽⁶⁾ 同意・不同意は、それぞれ肯定的断定・否定的断定(もしくは、「否定文」が同意・不同意を求められたときにはその逆の順序で)を行なうこととほぼ同じであろうから、クワインは被験者が断定という言語行為(もしくは非言語的行為)を行なうことも否定し

ないであろうと思われる。また、同様に、命令、称讃、約束その他の言語的・非言語的行為を行なうことも否定しないと思われる。われわれは、同意・不同意を表明せず、断定も行なわず、命令も称讃もしない、つまりおよそ言語行為をいっさい行なわない言語使用者を考えることができないからである。

しかし、あえてわれわれはこの点に関しても不確定性を主張すべきであろうと思われる。クワインによると、原地語のある文 S_1 を翻訳する場合、翻訳のマニュアル M_1, M_2 が与える翻訳文 $M_1(S_1), M_2(S_1)$ は真理値が異なる可能性があるという（論理的両立不可能性）。疑問文、命令文等いわゆる遂行文は、通常の形での真理値を持たないであろうから、 $M_1(S_1), M_2(S_1)$ が異なった真理値を持つためには、 $M_1(S_1), M_2(S_1)$ 、そして S_1 はいずれも「事実確認的 (constative)」な文であると思われる。そこで、では、 S_1 を疑問文 $M_3(S_1)$ へと翻訳するようなマニュアル M_3 は可能であろうか。また、命令文 $M_4(S_1)$ へと翻訳するようなマニュアル M_4 はどうであろうか。クワインは、翻訳の不確定性の実例として、フランス語の 'ne...rien' の英語への翻訳が、'not...anything' ともできるし、'rien' = 'nothing' として 'ne' を冗語とすることもできると述べている。⁽⁷⁾ 彼がこの例をあげている議論のコンテクストは別として、この「実例」を好意的に考えれば、 S_1 を疑問文 $M_3(S_1)$ や命令文 $M_4(S_1)$ へと翻訳することも可能であるように思われる。たとえば、

'Can you pass me the salt?'
は、「お塩を取れますか。」とも「お塩を取って下さい。」とも、また「この料理は塩がきいていない。」とも翻訳することができよう。すなわち、英語のこの疑問文は、日本語の疑問文、要請文、記述文というタイプの異なる文へと翻訳が可能である。そして、それぞれの英-日翻訳マニュアルにおいて体系的に調整しながら意味を割りふり、行動上の差が現われないようにすることは原理的には可能である。したがって、われわれは次のよ

うに主張できるであろう。原地語のどのような言語的・非言語的表現を同意、不同意、疑問、命令等とみなすかは不確定である。さらに、一般に動物の例を考えてみればわかるように、そもそも被調査者が同意、不同意、疑問等を行なうかどうかについても不確定である。そして、もし疑問・命令等の行為の存在を仮説として立てたなら、それらを表現する文はその仮説のもとで（およびそれに依存して翻訳の各段階で採用される諸仮説のもとで）はじめて一義的に翻訳可能である。こうして、翻訳は徹底的に不確定である。

IV

IIで見たように、いかなる段階の翻訳も分析仮説、もしくは言語学者の「言語的習慣」に頼らざるを得ず、翻訳は全面的に不確定である。翻訳の中には、（通常の帰納に由来する不確実性は別として）クワインの言うような確定的な部分（(1)―(3)）と不確定な部分とがあるわけではないのである。また、IIIで見たように、被験者が疑問、同意、不同意、その他のいわゆる言語行為をそもそも行なうかどうかについても不確定である。したがって翻訳は全面的かつ徹底的に不確定である。

では、これらの結論の意味するところは何であろうか。1つは、われわれは刺激同義性と仮説依存的な意味論的相互関係（p. 71）とを区別することができなくなる。ということである。クワインは、本物の仮説と偽物の仮説について次のように求めている。

…それぞれの分析仮説も、またそれらがすべて集まってでき上がる壮大な総合仮説体系も、ある不完全な意味でしか仮説とは言えないものである。〔分析仮説による翻訳のケースを〕刺激意味の類似性による場面文 ‘Gavagai’ の翻訳のケースと対照させてみよう。後者の翻訳は、間違っている可能性はあるが、サンプルの観察から得られた本物の仮説である。‘Gavagai’ と ‘There is a rabbit’ とは、それぞ

れ、現地語の話者と英語の話者にとって刺激意味を持っており、われわれの推測が正しいにせよ間違っているにせよ、それら刺激意味はほぼ同一であるかはっきり異なるかのいずれかである。ところが、典型的な分析仮説については、そのようなことが全く言えないのである。ポイントは、分析仮説の真偽にわれわれが確信を持てないということにあるのではなく、(‘Gavagai’ のケースには存在したような) それについて真偽を言うべき客観的事態すら存在しない、ということにある (p. 73)。

つまり、‘Gavagai’—‘Rabbit’ のような場合には、仮説に依存しない客観的な刺激同義性の真相があるが、分析仮説に依存してでき上がった翻訳のマニュアルで与えられることになる意味論的同義性、たとえば名辞 ‘gavagai’ と ‘rabbit’ の同義性や高度に理論的な文どうしの同義性については、そのような「ことの真相」はないのだというのである。ところが、われわれが見たように、翻訳理論はそのすべてが分析仮説に依存しているのであるから、刺激同義性は実は意味論的同義性の一部ということになる。もしクワインが刺激同義性を認めるならば、それは、程度の差こそあれ、とりもなおさず意味論的同義性を認めることである。つまり、翻訳が全面的に不確定ならば、同義性はすべて意味論的な同義性である。

第二の注目すべき点は、名辞の指示対象が不確定となるということである。 *Word and Object* (1960) その他におけるクワイン自身の翻訳の不確定性の導出はかなりたくさんの要因がからみ合っており、必ずしも単純ではないが、ディヴィッドソンに従って、それは大きく次の三つに区分することができよう。⁽⁸⁾ まず、真理自体が不確定である可能性がある。すなわち、ある言語の同一の文が、経験に関する条件を十分に満たすある理論によれば真とされ、同時に、経験的に等価なもう一つの理論によれば偽とされる、というケースである (p. 27)。第二は、論理形式が不確定となる場合である。すなわち、何を単称名辞や述語や量化記号とみるか、さらに、量

化理論も含めてそもそもどのような論理を採用するのかという点で、翻訳の諸理論が異なる可能性がある (p. 61). 第三は、真理値と論理形式が固定されたとして、名辞に割り当てられる指示対象が各理論によって異なるケースである (§ 12). 本稿 I で紹介したクワインの議論は、主としてこの名辞の指示対象の不確定性から翻訳の不確定性を導出するものであった。

指示対象が不確定であることをもっと具体的に示すのに、対象の領域の置換 (permutation) を用いる方法がある。置換とは、ある領域からその領域自身の上への (onto) 1 対 1 写像 (one-to-one mapping) である。今それを ϕ としよう。すると、次のように、この ϕ を使って、ある名辞への指示対象の割り振り方が異なっている二つの理論が、その名辞を含む同一の文に対して同一の真理値を与える状況を作り出すことができる。まず第一の理論によれば、‘ x is red’ は、対象 a が赤いとき、そしてそのときに限り a によって充足されるとしよう。また、第二の理論によれば ‘ x is red’ は、対象 $\phi(a)$ が赤いとき、そしてそのときに限り a によって充足されるとしよう。ここで ϕ を、赤いリンゴを赤くないバナナへと置換し、それ以外のものはすべて自分自身へと置換する置換であるとする。そうすると、第一の理論では、赤いリンゴは a は ‘ x is red’ を充足し、第二の理論では、黄色いバナナ $\phi(a)$ は赤くないのだから、赤いリンゴ a は ‘ x is red’ を充足しないことになる。ところが、閉じた文 ‘ $\exists x(x \text{ is red})$ ’ は次のように第一の理論によっても第二の理論によっても同一の真理値が与えられる。まず、第一の理論によって ‘ $\exists x(x \text{ is red})$ ’ が真であるとする。すると、‘ x is red’ を充足するような対象 c が存在し、この対象 c は第一の理論によって赤い対象である。ここで ϕ の逆関数を ϕ^{-1} とすると、 $\phi(\phi^{-1}(c)) = c$ であるから、 $\phi(\phi^{-1}(c))$ は赤い対象である。すると、第二の理論によって $\phi^{-1}(c)$ は ‘ x is red’ を充足し、したがって第二の理論において ‘ $\exists x(x \text{ is red})$ ’ は真である。逆も、 ϕ が全単射 (one-to-one onto) であることを使って同様に証明される。したがって、‘ $\exists x(x \text{ is red})$ ’ は、第一の理

論によって真であるとき、そしてそのときに限り真である。同様に、この文に限らず、述語 ‘is red’ と変項と真理関数と量化記号を用いて形成されるすべての閉鎖文は、どちらの理論によってもそれぞれ同一の真理値が付与されることになる。

クワインの例で言えば、‘gavagai’ という名辞はうさぎとうさぎ相のいずれで解釈しても、またそれ以外の何かで解釈しても、翻訳に関与する証拠を文に対する同意・不同意という行動主義的な基準ではかる限り、全く差が出てこないことになる。また、必ずしもクワインのように言語に関して行動主義を採らなくても、文に対する話者の反応や態度の原因はなにか客観的な状況や出来事であると考えるなら、ディヴィッドソンのように文に対する内包的な態度を積極的に許容しても、同じく指示対象の不確定性が帰結することになる。⁽¹⁰⁾

翻訳の不確定性の第三の帰結として、真理値が不確定となるが、これは次のように見ることができる。

「雪は白い」は真である iff 雪は白い
これは、対象言語とメタ言語が一見して明らかに異なると、真理値がその翻訳理論に依存することが明らかとなる。

‘Snow is white’ は真である iff 雪は白い
これは、英語から日本語への翻訳理論に依存する。⁽¹¹⁾ さらに、翻訳の不確定性は異言語間に限らず、同一言語内でもまったく同様の効果をもたらす。すなわち、

「雪は白い」は真である iff 雪は白い
は、日本語から日本語への同音翻訳に依存している。したがって、なにか別の翻訳理論を採用すれば、「雪は白い」に対してこれとはちがった真理条件が与えられることになるであろう。

以上の結果、われわれは、一般にある人間の信念内容というのが徹底的に不確定であるのに気づくことになる。誰かが何かを言ったとき、われわ

れは「その人はどういうことを言ったのか」という質問には唯一の正しい答えがあると思っている。しかし、その答えは、発話者の言葉を解釈する理論に全面的に依存し、しかもⅢで見たように、最も基本的とはいえその人間の言語的活動に関する仮説に依存している。彼が何を信じ、何を望み、何を恐れているかといったさまざまな事柄を互いに補正的に調整することによって、その質問には証拠の点で同等に正しい無数の答えが可能であろう。この不確定性は、なにかわれわれの理論構築の不手際に由来する不完全さではない。被調査者の心の中には実は確定的な真相があるのに、われわれの心理学理論や翻訳理論の不備からそれをつかみそこねているということではない。そうではなくて、そもそもそのような真相などないのだ、あるいは、あると信じる合理的な根拠はないのだ、ということである。

この帰結を引き起こす最も大きな要因は、しばしば反対者たちの標的となるようにクワインの行動主義的な言語観にあるのではない。そうではなくて、その原因は、言葉の意味は単語という単位ではなく文という単位で、さらには文の集まりである理論という単位で把握されるべきだという彼の全体論的な意味論にある。だからこそ、理論全体としての経験的な内容さえ保持されるならば、理論を構成する個々の文や、さらにはその文を構成する個々の単語または名辞への経験的な意味の割り振りには、かなりの変動の余地が残されることになるのである。クワインは、なにも、現実にある翻訳理論や解釈理論になにか不都合や致命的な欠陥があると言っているのではない。われわれは、常になんらかの解釈理論の中で十分満足に行なっているのであり、不確定性に由来する問題は実生活ではけっして表面に現われない。それが問題となって浮かび上がるのは、たとえば他我、心身、意味、命題といった事柄に関する分野であろう。このように、翻訳の不確定性のテーゼは、言語と経験の結びつきのゆるやかさに由来する一つの結果である。

注

- (1) ページだけを示した引用は, Quine (1960) からである.
- (2) Quine (1960) は指摘していないが, この段階ですでに 翻訳の不確定性が少なくとも二つの点で侵入している. 一つは, 何を被験者の同意・不同意の表現と扱うかという点, もう一つは, 観察文に帰される刺激意味の認定においてである. そして, 後者には, 通常の帰納の不確実性も伴う. II, IIIを見よ.
- (3) なぜなら, 原地語の何を同一性表現と見るかの決定は, 名辞の同義性決定への道を開く分析仮説の採用にほかならないからである. というより, クワインにとって, 同一性表現は端的に一般名辞である. cf. § 24, p. 231.
- (4) ただし, 被験者の混乱を避けるために, テストされる文は適切な程度に短くとする. p. 57.
- (5) Quine (1969), p. 312.
- (6) Quine (1965), p. 146-147. Quine (1969), p. 304. Quine (1960), p. 74.
これらの箇所は, いずれも, 不確定なのは同意の内容, 恐れ・欲求の内容, 信念の内容であって, 同意や欲求そのものの存在に疑いが提出されていない.
- (7) Quine (1968), p. 30.
- (8) Davidson (1979), p. 228.
- (9) Wallace (1977), pp. 305-325.
- (10) Davidson (1979), p. 231.
- (11) cf. Aune (1977), p. 293.
- (12) Chomsky (1969), pp. 53-68. Chomsky (1975), Ch. 4. Katz (1978), Katz (1981), Ch. 4.

参 照 文 献

- Aune, Bruce (1977). "Root on Quine", in French, Uehling, and Wettstein (1979), pp. 290-293.
- Chomsky, Noam (1969). "Quine's Empirical Assumptions", in Davidson and Hintikka (1969), pp. 53-68.
- (1975). *Reflections on Language*. Pantheon Books, New York.
- Davidson, Donald (1979). "The Inscrutability of Reference", in Davidson (1984), pp. 227-241.
- (1984). *Inquiries into Truth and Interpretation*. Clarendon Press, Oxford.

- Davidson, Donald and Jakko Hintikka (1969). *Words and Objections: Essays on the Work of W. V. Quine*. Reidel Publishing Co., Dordrecht.
- French, Peter A., Theodore E. Uehling, JR. and Howard K. Wettstein (1979). *Contemporary Perspectives in the Philosophy of Language*. Univ. of Minnesota Press, MN.
- Guenthner, F. and M. Guenther-Reutter (1978). *Meaning and Translation: Philosophical and Linguistic Approaches*. Duckworth, London.
- Katz, Jerrold J. (1978). "Effability and Translation", in Guenther and Guenther-Reutter (1978), pp. 191-234.
- (1981). *Language and Other Abstract Objects*. Basil Blackwell, Oxford.
- Quine, Willard Van Orman (1953). "Two dogmas of empiricism", in Quine (1961).
- (1960). *Word and Object*. The MIT Press, Cambridge, Mass.
- (1961). *From a Logical Point of View*. Second ed, Harvard UP., Cambridge, Mass.
- (1965). "Propositional Object", in Quine (1966), pp. 139-160.
- (1966). *Ontological Relativity and Other Essays*. Columbia Univ. Press, New York.
- (1968). "Ontological Relativity", in Quine (1966), pp. 26-68.
- (1969). "Replies", in Davidson and Hintikka (1969), pp. 292-352.
- Wallace, John (1977). "Only in the Context of a Sentence Do Words Have Any Meaning", in French, Uehling, and Wettstein (1979), pp. 305-325.